

## 井伏文学揺籃期に見る竹久夢二の影響 — 中学時代の詩画集における少女的世界を中心に —

青木（秋枝）美保  
（人間文化学科）

本稿においては、新資料、井伏鱒二高田類三（福山中学の同級生）宛書簡からの情報を踏まえて、井伏の文学揺籃期の世界観の特徴を明らかにする。井伏の福山中学時代の絵画・詩画に竹久夢二の詩・短歌が引用されていることを指摘し、そこに、明治末期の婦人雑誌における、自然と一体化する少女の心象世界、「オトメ」の感性共同体への自己の仮託があり、そこに超越的な表現の世界を構築することが、生きにくさを乗り越えるための戦略であったことを示す。【キーワード 井伏鱒二 竹久夢二 一九一〇年代文学】

### はじめに

井伏鱒二文学揺籃期の動向については、自伝的作品や早稲田大学時代を描いた作品を除いては情報が少なく、ましてやそれ以前の歩みについては、影響が考えられる父や兄の漢文学や仏教についての言及があるのみで、これまでそれほど話題にされたことはなかったと言つてよい（注1）。

「二年半」という時間の意味についてはさておき、その生活は「仲間のところに遊びに行き度いとも思つたことはなかった」ほど、「悠暢な、何者にも攪拌されない生活」であったと言える。それは、どのような生活であったのだろうか。それについては、これまで小説内部のわずかな表現の片鱗を覗いては伺い知ることができなかった。

ところが、二〇一六年に、新資料として、井伏の福山中学時代の同級生の遺族から井伏の書簡約一七〇通がもたらされ、その中に井伏の文学揺籃期の事情を計る情報がかなり含まれていることが判明した。福山中学卒業前後の動向については、すでに前田貞昭が詳細に検討して論文「井伏鱒二の寄宿舎（福山中学校寄宿舎・誠之舎）在舎時期とその周辺事——福山誠之館同窓会架蔵資料調査から——」に発表している（注2）。また、青木（秋枝）が、この書簡の宛名人・高田類三の福山中学卒業直後の文学活動について明らかにしている（注3）。それらの調査によって、早稲田大学の畏友、青木南八亡き後、不遇をかこつ因島時代の井伏にとって、高田類三が文学の導き手として大きな存在となつていたことが明らかになった。つまり、大正一〇年十月三十日の高田宛の井伏書簡の文面から、当時すでに代表的短歌雑誌『創作』、『アララギ』に作品を投稿し、ある程度の評価を受けていた高田が、井伏にとって、創作の資料提供者として頼みにする存在であったことが指摘された。

井伏と高田は、福山中学時代の絵画サークルのメンバーで卒業後も活動が続けていたことが、高田宛書簡によって明らかになっている。中学時代の絵画については、藤谷千恵子編『井伏鱒二画集』（注4）に掲載されたものが知られているが、中には、自然の生物の写生の他に、詩を付した童画的な少女を描いた詩画集があり、これについての言及はこれまで全くない。この少女的な表現世界は、同じくこれまで全く取り上げられていない昭和三年発表の『少女画報』掲載の小品二作につながるものと言える。また、これに関連するものとして、美人画一幅がある。さらに、十代後半の作品と見られる自画像二種類があり、これには漢字で讚が記されている。これらの絵画作品についても、これまで取り上げられることがなかった。

## 一、井伏の中学時代の表現世界

### ―「煉獄」に対するオトメの感性共同体

『誠之館百三十年史』（注5）によれば、「きびしい学校の指導方針のもとに、舎生たちは、一方ではきわめて禁欲的な日常生活をおくりつつ、他方では、勉強とスポーツに青春のエネルギーを燃焼した」とのことで、舎生は、「日課の励行と時間の厳守」、「品位のある生活指導」、「娯樂的行為の禁止」、「暴力的行為の禁圧」の四つの方針のもとで、生活指導を受けた。腕白盛りの少年たちを指導する側の緊張感が推察される。

こういった厳しい日々の生活における井伏の生活感情の一端は、前掲前田の論文に紹介されている、昭和戦前期の『福山学生会雑誌』（注6）における一学生（福山学生会学生幹事の杉山壽雄）の訪問インタビュー記事（第88号（昭和一四年七月十日に掲載）の「井伏鱒二氏を訪ねて」）から推測される。これは、「井伏研究者の間では未紹介の訪問記事」という。

この記事は、「郷土出身の作家」となった先輩の井伏鱒二に、後輩学生が、その中学時代の生活について聞き書きしたものであるが、その中で、井伏は、中学一年の時に「皆に非常に可愛がられ」たが、それを「嫉ん」だ上級生から「虐め通」され、暴力を受けたことを挙げて「私の中学校時代は全くの煉獄の様なものでした」と述べ、さらに、「本当に私の学生生活殊に中学生々活はまるで悪夢をでも見て来た様です。」とその辛さを語っている。そして、そういった体験をすると「弱い者は非常に一生影響をする様な精神的打撃を打けるものなのです」と述べ、そのような行為が「鉄拳制裁なども流行した時代」の弊風であり、「人道上許すべからざる事なのです」と、後輩に言い聞かせるように述べている。

ただ、「故郷にも懐しいものはありますよ。ですがそれは山や川や樹木だけなのです。そしてそれは非常に懐しいのです。又親しい友も居ります。」と述べており、井伏が、厳しい中学生活の中で、郷里の自然との交感、それも気の合った友人との休日の外出などにわずかに居場所を求めたことも窺われるのである。

次に挙げるのは、新資料、高田類三宛井伏鱒二書簡の最初期のもので、福山中学を卒業した大正六年八月の葉書である。井

伏と高田ら同級生数名が「蘇迷蘆会」という絵画サークルを作って活動していたことは青木（秋枝）の前掲論文にあるが、このサークルは学校公認の課外活動には記載がなく、生徒の全く自主的なサークルであると言える（注7）。次の葉書からはその活動の一端がうかがえる（翻字責任者 前田貞昭、以下同様）。

大正六（一九一七）年八月六日 絵はがき

《表》 芦品郡新市町K川 高田瑠璃三様

軀津にて 土岡／井伏

一 應平田宅ニヨルヲ 二時ニ迷蘆會ノ事

一、八月十日午後二時ヨリ

一、會費僅少

一、會場松ケハナ塩湯

一、創作持参ノヲ

但シナケレバソレデヨシ

右御通知申上候也

尚會場等ニ不同意ノ時ハ其ノ場合変ヘルトスル

福山市の戦前の絵葉書（年代不詳）に「福山入江松ケ鼻 備後」というのがあり、そこには、海岸から引き込まれた「入江」（現在は埋め立てられて、ない）とそこを航行する小舟が映っている。また、「塩湯」は銭湯のことのようで、戦前の福山市地図（『大日本職業別明細図』東京交通社発行 昭和十五年三月）に、入江の沿岸の御船町（当時の地名）に「潮湯」があるのが確認できる（注8）。

前掲の『誠之館百三十年史』によると、日曜日に帰省しなかった生徒の「ほとんど全員が、屋外でスポーツをするか、弁当・間食をたずさえて舟遊・遠足に出かけた」という。特に「舟遊」は、明治末期から大正初期もつとも好まれたリクリエイションであったとのことで、大正二年から七年まで、毎年二回以上八回程度実施された。これらの舟遊の際には、「福山入江」を舟行したようである。「入江」は海を遠望する景勝地で、スケッチに最適の場所であったと思われる。井伏たちはそこでスケッチをし、銭湯でくつろいで帰舎したのではなからうか。前掲の葉書における、絵画サークル「蘇迷蘆会」の集合場所は、その習慣が卒業後も引き継がれたことを推測させる。

この頃の井伏の画業については、藤谷千恵子編『井伏鱒二画集』（前掲書）に解説がある。中学時代の画業について、「福山中学校に入ってから、良い絵の先生がいたりして、二・三年頃から漠然と将来は絵を描く人になりたいと思うようになった。

休日、眼鏡と絵の道具を持って写生に出かけたりした。」とある。これと同主旨のことは「半生記」にも述べられている。「良い絵の先生」というのは、東京美術学校出身の、美術の新風に触れた教師であった(注9)。これらの絵のうち、作成日時と名前を自筆で記した中学時代のものがある。

中学一年生(一九一二年、十四歳)

家、トンボと蝶、たけのこ、金魚、鯉(鉛筆・水彩)

※いずれも「第一学年 井伏満寿二」と自書されている(学校の提出物か)。

中学二年生(一九一三・大正二年)十五歳

嶺の雪の日(水彩)

※「1913 M. Ibushii」と自書。

中学四年生(一九一五・大正四年)十七歳

詩画集『ふるへる木の葉』(ペンと水彩) 1〜8

※表紙に「ふるへる木の葉 Vol. 1 1915 M. Ibushii」と自書されている。

特に注目されるのは、詩画集『ふるへる木の葉』である。これは、「生家の蔵の中からみつけられた手作りの詩画集で、一冊に綴じられている」という。頁ごとに竹久夢二的な少女の絵が描かれ、童謡のような詩が添えられている。これについて、藤谷は次のような解説を付している。

井伏少年は、『少年世界』『少年』とかの雑誌を東京から取り寄せて読んでいた。中学へ入ってからは『日本少年』だったという。母親は『女学世界』を読んでいたそうである。「中略」大正初期、竹久夢二の絵が掲載されていた。井伏少年は、目にする雑誌の絵に倣って、詩画集を作ってみたのだろう。前年には有本芳水の詩集が刊行され、大変な評判だった。井伏少年も町の本屋で買ひもとめている。詩集を手にしたのは初めてで、何もかも目新しいものに感じたそうである。手作りの詩画集を作る一因となっているのかもしれない。

『ふるへる木の葉』には、少女像を描く挿絵と娘像を描く挿絵それぞれ三頁ずつがあり、それぞれの挿絵に一篇ずつの詩、短歌が添えられている。

(少女像に付された短歌一首と詩二篇)

1、小鳥等も梢をおりて鳴く日なり／ われに母あり おもふことなし。

2、ねむの木／ねむの木／ねやしやんせ。  
お鐘が／なつたら／おきやしやんせ。／ ……。

3、岡の屋敷へ蔵たてゝ／蔵のとなり松うゑて／松のなりに竹うゑて  
竹のとなり梅うゑて／梅の小枝に鈴さげて／その鈴ちやらく鳴る時は  
嬢さまさぞく／うれしかる。うれしかる。

(娘像に添えられた短歌二首と短唱一篇)

4、いざ縫はむ／今日も一日／ぬひくぬひて／五年になりて／君にとつがむ。

5、はてしなき／なげき

6、悲しさも／はた／うれしさも／袖かさね／うたへば／なごむ／少女と／いふ日。

これらの短歌・詩のうち、詩2と3は、竹久夢二の詩の引用である。短歌1、4、6は、竹久夢二の作品集(『竹久夢二文学館』1～8日本図書センター 一九九三、及び『初版本復刻竹久夢二全集』第一期・第二期 ほんぷ出版 一九八五)に収録されているものの中からは該当の作品を見出すことができなかった。また、『芳水詩集』(一九一四・大正三年、実業之日本社)の中にも見出すことができなかった。

詩2は、童謡集『ねむの木』(一九一六・大正五年三月、実業之日本社 注10)冒頭に収録されている童謡と全く同じである。詩3は、『日本童謡撰 あやとりかけとり』(一九二二・大正十一年一月、春陽堂 注11)に収録された詩「鈴」と、冒頭と末尾の詩句が異なるのみで全く同じである。詩「鈴」は、「千畳座敷の唐紙育ち。／山を拓いて、蔵建てゝ、」と始まり、「蔵の隣に竹植ゑて」から「梅の小枝に鈴さげて」までは同じで、その後は「手綱絞の紐つけて、／その鈴ちやらく鳴る時は／坊ちやまさぞく嬉しかる。／嬢ちやまさぞく嬉しかる。」となっている。

これらの刊行本は、『ふるへる木の葉 vol.1』表紙に記載の「1915」よりも後に刊行されていることから、井伏はそれ以前に雑誌等に掲載されたものを見たと考えられる。藤谷が述べているように、井伏の母が購読していたという『女学世界』、また自らが読んでいた『日本少年』にも竹久夢二の作品は掲載されている。『女学世界』の目次(注12)を見ると、「日本の子守唄と若き旅人」という題目が、第一二巻第四号(一九一七・明治四五年二月二三日)に見られる。因みに、井伏の福山中学在学期間は、一九一二・明治四五年四月から一九一七・大正六年三月までである。その間の『女学世界』への掲載作品のうち、挿

絵・表紙絵以外に本文の目次に掲げられているのはこれだけである。

竹久夢二は、『あやとりかけとり』（前掲）の「序」において、その編集意図について、「一九一六年に出版した「ねむの木」に、その後古い本の中から、または諸方へ旅行した折々、口伝てに拾ひあつめた童謡幾篇かを書き添へ、一九一九年に出した「歌時計」の姉妹編のやうな形で、この本の出版を思立つた。」と述べている。傍線部からは、井伏の引用した詩2、3が『女学世界』掲載の「日本の子守唄」にある可能性を示唆する。

また、これらの絵について言えば、岩田準一編『夢二抒情画選集』上・下巻（昭和二年 宝文館 注13）に収録されている作品の内、巻末に示された初出一覧で『女学世界』掲載として挙げられているものには、「夕陽」（『女学世界』明治四五年七月）、「六月の夜」（同）、「団扇」（同 大正元年八月）、「若き母」（同）、「おばしま」（同 大正元年九月）、「一握の砂」（同）があり、これらはすべて着物姿の若い女性を描いたものである。

また、『日本少年』掲載の作品については、岩田の解説によれば、「明治四五年十月から大正元年十二月に亘つて」「少年の春」という題名で書いた「散文と小唄」、また「大正二年一月から十二月まで」、「思ひ出』（When I was young age）という題名で書いた「小唄」があり、これらはいずれも『絵入小唄集 どんたく』（実業之日本社 大正二年十一月）に収録されて「沢山の読者に永い記憶を植附けたもの」とある。その中には、「かくれんぼ」（『日本少年』 明治四五年七月）、「郵便脚夫」（同 大正二年一月）、「雪」（同 大正二年二月）、「山賊」（同 大正二年三月）、「どんたく」（同 大正二年四月）、「幼年時代」（同 大正二年七月）、「七つの柿（筆者注：「桃」の誤植か？）」（同 大正二年九月）、「郵便函」（同 大正二年十月）があり、これらの絵はいずれも少年や少女の群像を描く童画で、少年の感傷的な感情を歌った詩が付されている。

竹久夢二の抒情の特徴は、前掲の詩の中から挙げるとすれば、詩「幼年時代」に代表される失われたものへの切ない愛着と言える。そして、少年を描く作品においては、それは自然の生き物との交流において体験される。例えば、「幼年時代」の冒頭の一節に「死んだ蛍を紙袋かんぶくろへ入れて／水を飲ましたら紙袋かんぶくろがとけて／生きた蛍が飛んで逃げた。」とあるように、失われたものを歌うことは「死んだ蛍」を生き返らせることであり、それは歌う詩人の心をも自由にすることにつながる。竹久夢二の詩は、失われたものを抱く人、つまり移ろう時間を生きる少年、少女、また家を離れて嫁ぐ娘、花嫁、旅芸人などが主人公で、彼等の欠落感を通して失ったものの遺す余韻に浸るものと言える。

#### 昔の歌（その一）

生れ在所の唐国寺御堂のわきの白壁に

かいた小唄のなつかしや

『お墓のうへに雨がふる。』

あめ あめ ふるな。雨降らば

五重の塔に巢をかけた

かあいゝ小鳥がぬれやうもの』

『松の梢を風がふく。』

かぜ かぜふくな。風吹かば

今日巢立ちした小雀が

路をわすれてなかうもの』

あのなつかしい唄の節

けさずにあれば今もある。

(『夢二抒情画選集 下』 注14)

ここには、入れ子型のフレームが幾重にも仕掛けられている。すでに消されて今はない寺の御堂の白壁に書かれた唄、その唄の中に描かれた、雨に打たれて巢を失った小鳥、風に吹かれて路を忘れた巢立ちしたばかりの小雀、それらはいずれも大事なものを失った者たちである。そして、それは「なつかしさ」を通して、その昔唄を書き付けた詩人のその昔の心に遡及しながら、現在の行き悩む詩人自身の感情を引き出す装置となっている。

ちなみに、詩の半ばにはめ込まれた二重カギ括弧内の歌は、童謡集『ねむの木』（前掲）に収録された童謡で、井伏が引用した「ねむの木」の歌の次に収録されている。つまり、夢二の表現世界は、幼年時代の自然体験が核としてあり、それを失われた現在から回想するという二重の構造を持つ。そこには、自然の中の弱い生き物たちと、それに共感する弱者としての少年の姿があり、それは現在の弱き生活者の詩人自身につながっていく。

夢二の歌に歌われているのは、失われたもの、他、身近な者と別れたり、はぐれたりして感じる「やるせなさ」、「はかなさ」など、その不在感からくる孤独感であり、それがいずれも身近な自然の中に流れ出してゆくとところに特徴がある。そこでは、作品世界に住むもの―人間と自然の生き物―がそれぞれの孤独感で次々につながって感傷の連環を作り、非現実の世界に感性の共同体を作っている。童謡の中では自然の生き物との交流であるが、官能的な歌になると、その対象は女性になっている。その代表的な作品が「宵待草」の「待てど暮らせど来ぬ人」を待つ女への共感である。

井伏の『ふるへる木の葉』には、夢二の絵や詩に漂うロマンティズムが強く感じられる。いずれも少女像に添えられた詩や短歌には、木や小鳥など自然の生き物との交感に心弾ませる少女の幼い抒情性があり、娘像のそれには、嫁ぐ人への思いや「なげき」、「悲しさ」、「うれしさ」に胸をときめかせる乙女の感傷性がある。詩には五七音のつらなりや同音の繰り返し、手まり歌や数え歌、子守唄のような軽快なリズムがあり、いずれも竹久夢二の詩画に通ずる少女や娘の抒情的世界がある。井伏の詩画集における短歌1、4、6は、井伏の独創であるか、また他の作者の引用であるか今のところ極めがたいが、毎日の縫い物の一針一針に思いをこめて嫁ぐ日に思いを馳せる乙女の姿や、「うたへばなごむ」少女の姿には、夢二に通ずる、女性の心の世界への自己投影の方法があると言える。ただし、これらの詩にあるような少女や娘の満ち足りた世界は夢二の短歌にはあまり見られない。

夢二の短歌は恋の歌が多く、官能的なものも多い。短歌の中に「小鳥等」の出て来るものを探してみると、次のようなものがある。

小鳥等は巢に帰りゆくいざ女今宵の宿をさがしにゆかむ  
鳥は巢へ狐は穴へ帰る頃巢なき男は浅草へゆく

(『夢二画集 花の巻』明治四三年五月 洛陽堂 注15)

ここでは、巢に帰る「小鳥等」や「狐」と、巢のない男、あるいは女とを対比し、男のやるせなさを描いている。

これに対して、短歌1は「小鳥等も梢をおりて鳴く日なり／ われに母あり おもふことなし。」とあり、「小鳥」と「われ」を対比する仕組みは同じであるが、警戒心なく梢をおりて鳴く鳥は「われ」と共にあり、また「われ」には「母」もあって、何も思い煩うことがないという幸福感を歌っている。夢二の短歌に「泣くときはよき母あり遊ぶにはよき姉ありき少年の頃」(『夢二画集 夏の巻』明治四三年四月・洛陽堂 注16)というのがあり、それは満ち足りた少年の頃を回想するものとなっているが、短歌1の場合は今まさに少年時代の満ち足りた体験をリアルタイムで歌うものとなっていると言えよう。一方、夢二の短歌ではなく詩であれば、これに近いものがある。詩「春の絵」(『小供の国』明治四三年十二月 洛陽堂 注17)がそれである。

木の枝では、小鳥がチ、チ、チ、と歌ふ。

開いた絵具箱のうへを蝶が舞ふ。

カンバスは、次第くに彩られてゆく。



この詩が描く少年の姿には、休日に寮を出てスケッチを楽しむ井伏に通じるものがある。挿絵には、スケッチに行く洋装の少年が描かれている。井伏は、夢二が描く、このような少年の自然との幸福な交流の世界に、自らの生活の幸福を見出していたのではなからうか。

そういったことは、短歌4、6でも同じように言える。夢二の作品においては、「嫁ぐ」ことに幸福を感じる女性は描かれていないように思われる。例えば、詩「嫁入り」(『青い小径』(大正一〇年七月 尚文堂 注18)には、「世間の親は／かうしたものと／人も言ふから／あきらめて／多くの娘が／するやうに／だまつて／お嫁にまいりましたよ。」とあり、世間の定めに従って「あきらめて」嫁ぐ娘の思いが描かれており、夢二の描く女性は大半が社会の中で思うに任せず、やるせない思いを抱く女性たちである。短歌4のように年満ちて縫い物が完成して嫁ぐ日を喜ぶといったものはなく、子供や思い人のために縫い物、編み物をする夢二の女性たちは、縫っては破け、編んではほどけ、シジフォスの神話のように永遠に徒勞の営み続ける姿で描かれている。例えば、詩「母」(『夢のふるさと』収録大正八年八月 新潮社 注19)、詩「靴下」(『青い小径』前掲)などがそれである。

また、もう少し年齢の低い「少女」を描いた場合でも同じことが言える。夢二の詩(あるいは短唱)「春宵譜 ある少女の手記より」(『春の贈物』収録 昭和三年 春陽堂 注20)から、短歌4、6と類似の表現を持つ部分を挙げると、次のようになる。

悲しみかはた歎びか／わがしらず／春の心にしづむころかな

〔中略〕

君がため／あむ靴下の爪紅に／かかるは雪か吐息か

〔中略〕

君がため／夜ごと夜ごとに窓をあけ／心をとちてまぢぬいっよ五夜は

短歌6と「悲しみかはた歎びか」の歌を比較すると、夢二の場合が「春の心にしづむ」思いが「悲しみ」か「歎び」かと決めたかかかっている物思いの様子を歌っているのに対して、短歌6は、「悲しみ」「歎び」を挙げる歌の構えは同じであるが、いずれの思いも「うたへばなごむ」と歌うことの楽しさを表現することに収斂するところは対比的である。短歌における年数の使い方も同じことが言える。「五夜は」心を閉ざして待つという夢二の表現には、「君」が来るまでの期間を限定することで来ないかもしれない「君」の来訪を確実なものにしたい切ない乙女心が秘められている。短歌4では、「五年になりて」は年満ちる意味が強く、それは「嫁がん」という娘の意志の強さにつながる。

短唱5「はてしなきなげき」に附された絵は、顔を掩って嘆く着物姿の女性像であるが、夢二の絵に多くある同じような嘆く女性像の垂流と言える。しかし、以上見て来たように、中学四年生前後の十代半ば制作の本詩画集にはその女性の「なげき」の具体的な表現は見られず、あるのは少女や娘の満ち足りた抒情的な世界だと言つてよい。夢二的な表現の構えを借りながら、夢二の作品に描かれた少年少女の自然との交流や娘の未来への希望に自らの幸福を見出し、自らもそのような世界を言葉と絵で構築することに無類の楽しみを見出していた少年井伏が想像される。そこには中学校での「煉獄」のような辛さの中で、表現世界に別世界を構築することによって、厳しい現実を生き延びようとする方策を見ることが出来る。そこに、夢二的表現に影響を受けた井伏文学の原点を見出すことができる。

こういった感性は、大正末年まで続いていくと考えられる。前掲の『井伏鱒二画集』には、「木蔭」と題する美人画が収録されている。これは、井伏生家に所蔵されている(注21)。この軸には「井伏鱒二 木蔭 大正十三年一月 表装」と墨書されている。藤谷は「一九二一(大正十)年から一九二三(大正十二年)にかけて、東京と郷里の間を何度も行ったりきたりすることになる。そのいずれかのときに生家で描かれたもの。」と解説し、日本美術学校別格科での受講内容との関係を示唆している。その美人画制作との関連を推測させる高田宛の葉書が一通ある。

葉書〔大正九(一九二〇)年五月一日あるいは四日〕(初公開)

《表》備後苜品郡新市町 高田類三様

松坂屋と三越と白木は先日一應まはりましたが店にならべられてあるのも来て居る人のも、ひきたつのをかけてゐる人はありませんでした。神田で一ついゝのを見ましたが うつしたのをなくしたのでおいしいことをしました。で、通りすがりや電車の中で私として見たところいゝと思つたのをざつと描いたまゝですけれどお送りします。今度はゆつくりといゝのをお送りしたいと思つてゐます。襟は何といつてもくどくど、はいけません様です。春のせいか当地は薄紫色のそれが流行してゐます。〔後略〕

ここには、女性美への関心とその視覚的な鑑賞と再現への情熱が伺われる。

以上のような女性的感性の傾向をうかがわせるものとして、小説「槌ツア」と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること(注22)に登場する「槌ツア」の娘「お花ヤン」と村長の娘「お小夜サン」の文通の文章が想起される。

「川べに立つ乙女より、なつかしの心の君様へ。霞の空の雲雀のやうに、はるかに高く清き私たちの誓ひは、たがひに忘れじ忘れまじく、云々」

この手紙は校長から咎められ、以後文通は禁止されるのであるが、これまでの井伏の中学時代の詩画集、卒業後の葉書を見れば、ここに井伏の中学時代前後の生活感情の一端があることを想像することはあながち無理ではないように思われる。それらは、まさしく井伏の母が購読していたという『女学世界』といった婦人雑誌の投書欄の文章にその情報の源があると言える。

川村邦光は、『女学世界』の読者投稿欄「誌友倶楽部」一九一六（大正五）年の文章を分析した結果、そこに文通を介して構築されている「（想像の共同体）の共同性／共通性」を見出すとともに、それがロマンティックな独特の文体を通してなされていることを指摘し、その文体を「オトメ体」、その共同体を「オトメ共同体」と名付けた（注23）。こういった読書欄の傾向は、嵯峨景子の調査によると、『女学世界』（創刊一九〇一・明治三四年）に前述の「叙情的な文体」が現れ出すのは一九一五（大正四）年であり、一九一八年（大正七）年にピークを迎えて、一九二〇（大正九）年から激減するとしている（注24）。このような『女学世界』の受容史は、井伏の中学時代（一九一二・明治四五年～一九一七・大正六年）にそのまま重なっている。井伏の表現世界は、母を通じて受容されたこのような少女的抒情の世界への共感から始まったと言える。そこには、現実社会において弱い立場におかれていた女性たちの、生き抜くための方策があったと言っている。

そして、作家となった井伏は、小説「山椒魚」発表の前年に少女小説を二篇発表している。

○「幻のさゝやき」

『少女画報』・東京社 昭和三年一月一日 第十七卷第一号（『井伏鱒二全集』一卷所収）

角書き 本文表題「少女物語」、目次表題「少女哀話」

○「永遠の乙女」

『少女画報』・東京社 昭和三年十二月一日 第十七卷十二号（『井伏鱒二全集』一卷所収）

角書き 本文表題「神秘小説」、目次表題「少女物語」

『少女画報』には竹久夢二も作品を発表しており、井伏は中学時代に読み親しんだと思われる作家夢二と並んだと言える。

井伏のいずれの小説も「美智子」という少女が主人公で友達のもうひとり少女との死を介した交情を描いている。「幻のさゝやき」は、「お兄様」に連れられて隠岐の島へ旅行に出かけた「美智子」が、旅館の娘「麗ちゃん」という美少女と櫓遊びをする話で、吹雪の中で「麗ちゃんが好きよ」とくり返しささやくというもの。「永遠の乙女」は、美智子と葉子が登山をする話で、葉子が滑落して落命、その麓の川べりに住み着いた美智子が五〇年を経て、その川にオフェリアのように流れ着いた葉子の遺骸に巡り会うというもの。「麗」も雪の中の遊びで病に倒れるのであり、生命を超えて結び合う二人の友情が描かれる物語である。そこには、青木南八の死の主題が響いていると言える。小説「鯉」の発表は、一九二六（大正一五）年九月である。

## 二、井伏の早稲田大学時代の表現世界

### ―青木南八の「近代リリズム」の主張

中学卒業後の井伏は、早稲田大学文学部仏文学科での西洋文化、特にフランスの世紀末文学の世界を知ることとなる。それを畏友・青木南八の講演草稿「ジャン・ジャック・ルソーの性格とフランスに於ける近代リリスムの起源」、*「ボードレールの散文詩について」*から見ておきたい（注25）。いずれも「青木南八遺文」中の文章で、前者は、早稲田大学恩賜館での月例会講演草稿を「校訂」したもの（大正一〇年五月）、後者は早稲田大学講堂でのボードレール記念祭における講演草稿を「補正したもの」（大正一〇年一月）という但し書きが付されたものである。

前者において、青木は、十七世紀のフランスにおいては文学が社会化した結果、リリスムが失われ、個性や自我が影を潜めたのに対し、ルソーは、自我と感性重視の表現を主張して、十八、九世紀のフランス文学史に大きな影響を及ぼしたとし、その意味で「近代人の最初の人」と位置づけている。

以上を要約してみると、ジャン、ジャック、ルソーは、意的には弱い、さうして不思議な洞察力といふか、智恵の鋭さといふか、そういふものを具へてゐた。そしてまた、驚くべき鋭敏な異常な病的なサンシビリテの為に苦しんだ不幸な人間であつたといへる。さうして、人間を嫌ひ、社会を嫌ひ、自然を好み一言ひ忘れたが、ルソーのサンシビリテは自然に對しても十分鋭敏であつた、自然の美を正確に深刻に感じ得、又描き得た人として「中略」仏蘭西に於ける最初の人ともいへよう、――孤独を好み、要するに自己そのものにもつとも興味を感じて、もつとも多く、もつとも自由に、自己自身を語つた人であつたといへよう。

ここでは、「自我を語る芸術」「詩」、そして「詩」を構成する「感情」の重要性が指摘され、「リリックは純然たる自己の感情の表現だ」というところに帰着していく。

後者においては、ボードレールの散文詩「巴里の憂鬱」を取り上げて、ルソーに共通する心性を指摘している。「巴里の憂鬱」の特徴を「ビザールな、エトランジな、極端に非現実的な、しかも非常に力強い芳醇な、エフェを持つもの」とし、そこに描き出されるのは「極端に非自然的な、極端に人工的な、感覚美の世界」であり、それがボードレールの「此の現実世界、現実の人間、人生といふものに対して持つてゐた *degoût* 嫌悪の情」から生じたものだ」と指摘している。

これらの論には、共通して厭世的な社会観とそれに対抗して作られた感性による美的な世界への陶醉と没入を主張する姿勢があると言つてよい。それは明らかに反自然主義的な主張であつて、そこには、自然主義の拠点としての『早稲田文学』に代わつて新たな時代を開いていこうとする青年の感性と意気を感じることができる。そして、青木のこの主張は、井伏がこれまで作り上げてきた、生き延びるための夢二的表現世界に共通する心性と言える。高階秀爾は、「世紀末の画家「竹久夢二」（注26）において「短い一時期」ではあるが、明治末年から大正期にかけて、日本の画壇は「西欧世紀末芸術の波」をかぶつ

ていたとし、その代表として「青木繁、藤島武二、竹久夢二という系譜を考える」という意見を述べている。

井伏が体験した早稲田大学の学生生活は、「鶏肋集」の「早稲田生活」にその一端を見ることが出来る（注27）。そこで井伏は、「可成り心酔した」という吉田絃二郎の講義について「吉田先生の講義は感傷的で且つ情熱的」であり、「朗読調の熱弁でもつて青春の私たちをうっとりさせるのであった」として、「いま尚はつきりと覚えていて」というその語調を再現してみせ、「私は幸福であつた。そのやうに先生の講話はポエチカルに私たちをふんわりさせたのである。」と述べている。

このように、井伏は、大学の講義に現実から彼を守ってくれる新たなシェルターとしての「ポエチカル」な世界を見出したと言えよう。そこでは、井伏は「蘇迷蘆会」ならぬ、「アイズル会」なる学生の新たな表現共同体に所属していた。そして、「私達は世の中は暗くて生きて行くべくつまらないものとしていた。けれどもその実、少しも暗くもなかったのである」と感じ、自由な学生生活を謳歌していた。野崎歓は、井伏の早稲田大学時代に「文学部黄金時代」という表題を付している（注28）。井伏の回想文「青木南八」に「誰も彼も若くて健康であつた。第一、絶望した者や病人などは教室へ出て来なかつたのである」と述べている（注29）。そこには、「つまらない」「世の中」を尻目に「文学」や「芝居」などを語る言葉の世界に、超越的な価値を構築しようとする青春のエネルギーがあふれ、それを抑圧・管理しようとする社会に対抗する団結力があつた。その基盤には自己表現による、教師と学生が作り出すネットワークがあつたと言える。

おわりに

井伏鱒二の文学史における位置づけは議論の途次にあると言える。本稿においては、井伏の福山中学時代の詩画集への竹久夢二の詩画の影響を指摘し、井伏の文学的出発に明治末期から大正期にかけての耽美的な表現世界の構築があつたことを指摘した。それは早稲田大学時代まで続き、片上伸教授とのトラブルによってその表現世界が破壊されるところから、初めて井伏の文学は本格的に出発していく。

竹久夢二は、処女画集『夢二画集 春の巻』（一九〇九・明治四二年十二月 洛陽堂）が好評で、翌一九一〇（明治四三年）年の内に続編三冊が続いて刊行されて一気に世に出て行った。同時代の動きを、白井吉見の『大正文学史』（注30）で辿れば、夢二が世に出たのは、反自然主義の動きが強まり、芸術至上派を中心とする詩人と美術家が一同に集結したパンの会の始まりと軌を一にする。それは一九〇八（明治四一年）年の末に始まり、一九一〇（明治四三年）年十一月の会を頂点として三年余りで途絶えたという。その中から出て行った石川啄木が『一握の砂』を刊行するのが、同じく一九一〇（明治四三年）年十二月である。

この三年間の動きはその後の大正・昭和初期の文学の原点をなす坩堝であつたと言えるのではなからうか。長田幹雄の研究ですでに明らかにされているが、竹久夢二が人気作家となる前、『平民新聞』にこま絵と俳句を発表するとともに、荒畑寒村、岡栄次郎らと起居を共にし、「平民社へ出入りする同志」（『寒村自伝』昭和三五年版）であつたことは知られている（注31）。

岡栄次郎は、早稲田実業学校で夢二と同級生であり、夢二は岡から、マルクス・エンゲルスを教わったという（注32）。

一九一〇（明治四三）年は、大逆事件における社会主義者の検挙が始まる年で、翌年一月二六日に処刑が行われた。石川啄木もその直後から社会主義に向かった。大衆作家としての夢二と社会主義は結びつかないというのが一般的な評価であるが、社会的な弱者としての女性や子供、旅芸人などへの共感の表現は、社会主義の精神の原点だと言える。夢二が民謡や童謡を収集し、民衆芸術への関心が強かったことも故なしとしない。井伏が、中学、大学と組織における弱者として辛い体験をしたことが、井伏文学の表現の姿勢を形作るようになったと考えられる。夢二文学がその原点にあったと言える。また、夢二が処女作を発表した洛陽堂は、『白樺』や恩地孝四郎の『月映』を刊行したことで知られるが、社主の河本亀之助は福山市沼隈郡出身である。井伏の中学時代の美術教師木山一雄は岡山出身で、東京美術学校卒業直後に福山中学に赴任した。井伏文学を地域の視点から見直す必要性を指摘しておきたい。

注

- (1) 『昭和作家のクロノトポス 井伏鱒二』（双文社 一九九六年）巻末「主題別参考文献」の「井伏鱒二の原風景」には、江戸期の地域の漢詩人、管茶山、井伏素老（父郁太の雅号）の影響を考察したものが多く、中学時代の詩画に触れたものはない。
- (2) 前田貞昭「井伏鱒二の寄宿舎（福山中学校寄宿舎・誠之舎）在舎時期とその周辺事福山誠之館同窓会架蔵資料調査から——」（『近代文学雑誌』30号 二〇一八年 月）
- (3) 青木（秋枝）美保「井伏鱒二未公開書簡の資料的意義―宛名人・高田類三の文学活動説明を通して―」（『日本近代文学』100集 二〇一九年五月）
- (4) 藤谷千恵子編『井伏鱒二画集』（筑摩書房 二〇〇二年三月）には、井伏が六十歳のときから約六年間通った荻窪の画塾時代の絵を中心に、「画塾以前と少年時代の絵により構成されている」という。井伏は、藤谷千恵子著『セザンヌの散歩道』に「序」を寄せている（『井伏鱒二全集』二七巻所収）
- (5) 『誠之館三十年史 下』（誠之館三十年史編纂委員会編 一九八九年三月）
- (6) 前掲前田論文に、この雑誌について「誠之舎（引用者注）同論文に「旧福山藩主阿部家によって設立・運営されていた学生寄宿舎」とある）に事務所を置く福山学生会が発行していた『福山学生会雑誌』である。」としている。
- (7) 『誠之館三十年史 上』（誠之館三十年史編纂委員会編 一九八八年三月）によれば、文化系クラブには雑誌部（主として校友会（誠之会）誌「誠之」の編纂）、講談部（大正五年度より「講演部」、大正十三年度より「弁論部」と改称）があるのみで、いずれも学校の教育内容に沿ったものである。
- (8) ここに紹介した資料（絵葉書、地図）は、シンポジウム「井伏鱒二未公開書簡の基礎的研究―「同学コミュニティ」の解明

をめぐって」(二〇一八年一月二四日・二五日、福山市内)と同時に開催で行なった展示「井伏鱒二の仲間達―井伏鱒二未公開書簡から」(同会場)で公開。現在は、「福山市東川口町2丁目2」の信号に「松ヶ端」という地名が残る。

(9) 図画の担当者は、一年生から二年生の初めの一ヶ月まで大塚 泰(明治二五年、東京美術学校卒業)、二年生の六月から四年生まで木山一雄(大正二年、東京美術学校図画師範科卒業)が担当。木山は岡山出身。(『誠之館百三十年史』・『東京美術学校卒業生名簿 大正十五年』・『東京芸術大学百年史』による)。

(10) 『竹久夢二文学館 第8巻 童謡童話集』(日本図書センター 一九九三年)所収  
(11) 注10に同じ。

(12) 『教育関係雑誌目次集成 第三期・人間形成と教育編』(日本図書センター 一九九〇年六月)

(13) 『初版本復刻 竹久夢二全集 第二期』(ほるぷ出版 一九八五年)所収

(14) 注13に同じ。

(15) 『竹久夢二文学館 第7巻 歌集』(日本図書センター 一九九三年)所収

(16) 注15に同じ。

(17) 『竹久夢二文学館 第3巻 詩文集I』(日本図書センター 一九九三年)所収、挿絵は、『初版本復刻 竹久夢二全集』(前掲書)所収本で確認。

(18) 『竹久夢二文学館 第2巻 詩集II』(日本図書センター 一九九三年)所収

(19) 注18に同じ。

(20) 『初版本復刻 竹久夢二全集 第一期』所収

(21) 注8の行事と同時開催の「井伏鱒二と同時代の画家展」(同展実行委員会 二〇一八年十一月二十一日〜二十九日 福山市内)で展示。

(22) 小説「槌ツア」と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること」昭和十二・一九三七年十一月発行『若草』第十三巻第十一号、『井伏鱒二全集』六巻所収

(23) 川村邦光『オトメの祈り 近代女性イメージの誕生』(紀伊国屋書店 一九九三年十二月)

(24) 嵯峨景子『『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容…大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に』(『マス・コミュニケーション研究』78巻 二〇一一年)

(25) 「青木南八遺稿(抄)」(『井伏鱒二全集 別巻一』 筑摩書房 一九九九年九月)

(26) 高階秀爾「世紀末の画家「竹久夢二」(『生誕130年記念 竹久夢二 大正ロマンの画家、知られざる素顔』竹久夢二美術

館監修 河出書房新社 二〇一四年一月 所収、初出『三彩』第二四二号 一九六九年 三彩社)

- (27) 「鶏肋集」(『早稲田文学』一九三六年・昭和十一年八月号、『井伏鱒二全集 第六卷』所収)
- (28) 野崎歓『水のおいがるようだ 井伏鱒二のほうへ』(集英社 二〇一八年八月)
- (29) 「青木南八」(『文芸都市』一九二八年・昭和三年五月、同年十一月、『井伏鱒二全集 第一卷』所収)
- (30) 臼井吉見『大正文学史』(筑摩書房 一九六三年七月)
- (31) 長田幹雄「車夫、書生、兵民社のころ」(『竹久夢二文学館 別館 資料編』(日本図書センター 同前)所収、初出『別冊太陽』No.20 平凡社 一九七七年九月)
- (32) 注31の文章から引用(初出雑誌『現代』昭和五年一二月号とある。)